

Two 'Prophecy' Plays : Robert Wilson's The Peddle's Prophecy and Teh Cobbler's Prophecy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米村, 泰明 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1030

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



二つの予言劇：Robert Wilson の2 作品を巡って

Two 'Prophecy' Plays – Robert Wilson's *The Peddler's Prophecy*
and *The Cobbler's Prophecy*

米 村 泰 明

YONEMURA, Yasuaki

はじめに

Robert Wilson (1572-1600)^(註1)は16世紀後半に4つのインターラードを書いている。すなわち、*The Peddler's Prophecy* (『行商人の予言』1561年頃。以下『行商人』)、*The Three Ladies of London* (『ロンドンの三淑女』1581年頃。以下『三淑女』)、*The Three Lords and Three Ladies of London* (『ロンドンの三貴族と三淑女』1588年頃。以下『三貴族』)、そして *The Cobbler's Prophecy* (『靴直しの予言』1590年頃。以下『靴直し』)^(註2)である。

これらの作品は、タイトルからもわかるように、二つのグループに分けられる。当時のイングランドの歴史的展開の中で、ロンドンの世相を、アレゴリカルな登場人物の行動を通して描写する喜劇仕立ての『三淑女』と『三貴族』。一方は庶民の代表が預言者として登場する『行商人』と『靴直し』である。^(註3)

『靴直し』が作成された時代は、アレゴリカルな道德劇の伝統から、個性ある人間が登場する演劇作品への移行期に当たるとも言える。1587年から88年にはKidの*The Spanish Tragedy*とMarloweの*Tamburlaine the Great*、が、89年に*The Jew of Malta*、90年に

はShakespeareが*Henry VI*を書いている。すでに道德劇は古めかしさを感じさせ始めていたジャンルなのかも知れないのである。Robert Wilsonの作品を通して後期インターラードからエリザベス朝演劇勃興への推移を総合的に考察することが本稿に始まる一連の研究の目的である。

本稿が取り上げるのは、最後の『靴直し』である。この作品には、道德劇の名残であるアレゴリカルな登場人物、神話の神々、後期インターラードの特徴である職業名や固有名詞を持つ登場人物が登場する。彼らは神々の世界と人間の世界の境界を越えて干渉しあい、その中で社会批判が行われるなど、特異な多面性を持つ作品となっている。また、『行商人』と比べても、異質な要素が見られる。本稿では『行商人』との比較を行いつつ、『靴直し』を当時の歴史的背景と文学伝統の文脈の中で概観し、『三淑女』『三貴族』を考察する次稿への足がかりにしたい。

時代背景と同時期のインターラードについて

ヘンリー八世の治世から、エドワード六世、メアリー一世そしてエリザベスへと続くチュー

キーワード：ロバート・ウィルソン、インターラード、道德劇
Key words : Robert Wilson, Interlude, Morality

ダー朝イングランドは、宗教問題を筆頭に、社会・経済・外交と激動の時代を経験していた。カトリックとプロテスタントの複雑な対立関係や、フランス、スペイン、さらにはスコットランドを相手とする外交政策などはいずれも一筋縄では行かないものだった。エリザベスの時代は、イギリスの黄金時代を築いたと言われるが、状況は決して良好なものではなかった。^(註4)

この時代のインターラードには、そのような時代を反映した作品が多く見られる。Nicholas Udall の *Respublica* (『国家』1553年) は、国政のあり方が社会の安定に深くかかわっていることを為政者に知らしめんとしているようである。1554年には外国人排斥の機運の盛り上がりを示す作者不詳の *Wealth and Health* (『富裕と健康』)、が書かれ、W. Wager の *The Longer Thou Livest the More Fool Thou Art* (『馬鹿は死ななきゃ治らない』1559年) では、教育問題が大きく取り上げられている。作者不詳の *Liberality and Prodigality* (『寛大と放蕩』1567年) や、Thomas Lupton の *All for Money* (『金がすべて』1577年) などは、社会的なテーマとしての金銭欲が引き起こす問題を描いている。*Liberality and Prodigality* では、諸外国での戦争に従事したものの、報酬を払ってもらえず困窮する士官が登場人物の一人にエリザベス女王への執り成しを求める場面があり、このような事態が国家の安定に好ましくないことが強調されている。

道徳劇と類似した内容を持っていた初期のインターラードから、社会的な問題を提起する媒体としての作品が多く制作されるようになってきたのである。^(註5)

登場人物も、内容の変化を反映して、道徳

劇の伝統を受け継いでいる初期の作品からは大きく変化している。初期から中期にかけてのインターラードには、道徳劇と共通する美德と悪徳の寓意が登場するものが多い。「人生の諸時期」のモチーフを持つ、Henry Medwall の *Nature* (『自然』1497年) や作者不詳の *Mundes et Infans* (『現世と幼児』1508年) などが代表的なものである。寓意と通常の間人が混在する混種劇の代表的な作品は作者不詳の *Godly Queen Hester* (『信心深いエステル王妃』、1525-29年) や John Phillip の *Patient and Meek Grissil* (『忍耐強く従順なグリゼルダ』1558-61年) などである。中期から後期インターラードの作品には、キリスト教的な寓意ではなく、「金銭」「困窮」「詐欺」など、より世俗的で現実に根差した寓意の人物が登場するようになる。また、職業名あるいは社会的地位を表す名前を持つ人物も登場してくる。彼らはまだ個人としての個性を持つには至っていないが、その職業あるいは社会的地位が一般的に受け取られている特性を持っている。つまり彼らは道徳的な寓意ではなく、社会的な寓意なのである。^(註6)

これら後期のインターラードは、プシュコマキアに代表される初期道徳劇がメッセージとして持っていたキリスト教的世界観とは大きく内容を異にしている。作者たちは、社会に目を向け、そこで何が起こり、それはなぜなのかを、それぞれの立場から指摘しているのである。

そのようなインターラードの歴史的発展の中で、まず、『行商人』を『靴直し』との比較において概観する。^(註7)

『行商人』について

『行商人』のプロローグにおいて、作者は、

真の予言と偽の予言の区別を述べている。真の予言は、神によってもたらされるものであり、それ以外は幻想と言うべきものである。それは無知なものをだますために人間が発明したものなのである。

To prophecie of things is a diuine inspiration,
Telling things to come with vnmoueable veritie:
A gift onely proceeding from Gods high maiestie.
A diuine inspiration he calleth prophecie,
That which doth all other Prophecies exclude:
Which are no prophecies, but things of mens fantacies,
Inuented to deceiue the ignorant and rude:
(5-12)^(註8)

行商人が登場すると、そのいかがわしさが明確となる。彼は、自分の商品の価値と効能に信憑性を付加するために、地上界、さらには海底、神々の領域である星の世界にまで足を伸ばし、商品を買って付けたことを述べる。このような吹聴の作法は、かつてサイクル劇でヘロデが己の権力を誇示するために行ったものである。^(註9) プロローグでの予言の真偽に関する台詞を聞いているものは、行商人の資質を知ることになる。

行商人は、この作品では、狂言回しの役割を演じる。さまざまな社会階層の者たちと出会い、論争を行い、社会批判を行う。この点において、行商人は、Joh Heywood の *The Play of the Wether* (『天候の劇』1528年) のメリー・リポートと同じ狂言回しの役を演じているといえるだろう。^(註10) 彼が出会うのは、庶民の家族、次に船乗りと冒険商人、さらに職人が加わる。次いで職人と家主、最後に教義解釈者と裁判官、判事の宗教・司法関係者のグループである。彼らはいずれも職業名を

持つ登場人物であるが、特定の個人を表すというよりは、抽象的な存在であると言ったほうが良いだろう。人間の性向を具体化していた道徳劇のアレゴリカルな登場人物が、職業名や社会的地位を名前に持つようになったのも、時代の変化がもたらしたものだろう。これらの人々を相手にどのような問題が論じられるかを概観する。

行商人が最初に相手にするのは娘とその母、さらに父親である。彼らとの会話に、当時の社会情勢を見て取ることができる。母親は「家も土地もないから娘を嫁がせられない」と嘆き、父親は、娘を外国人に嫁がせることはしないと断言。ここに見られるのは、当時の外国人への強烈な嫌悪感である。父親は、外国人との混淆が進むことにより、イギリス人の血が汚され、礼儀作法までがおかしくなり、財産が海外へ流出し、何らかの方法で食い止めなければ国家として由々しき事態になると憤慨するのである。(328-52行)

行商人は次いで、子供の教育問題に言及する。子供たちが誓言し、嘘をついても叱ろうとしない。子供たちを不適切に可愛がる両親は、身体にとっては親と呼べるが、子供たちの心の成長には有毒である。(418-23行) 子供の教育に熱心でない親に対する苦言であるが、父親からは年長者に敬意を持たない風潮に対する批判の言葉も飛び出す。(505-8行)

次のグループは、船乗りと冒険商人^(註11)、さらに遅れて加わる職人である。船乗りはまず高い技術を持つ船乗りが減っていることを嘆く。しかも、高い技術を学ぼうとする風潮が無くなってきているのである。(540-54行) 一方冒険商人は、航海で利益がでないことを嘆いている。「今度の航海で幸運に恵まれな

かったら、はさみ一丁で毛を刈ることで学ぼうか」(556-59行)という台詞は、輸出量が増加している羊毛業への転職でも考えているのだろう。船乗りは、商人達による富の取奪に不平を言う。冒険商人は、自分たちは職人よりも生活が苦しいこと、最近では破産が増えていることを述べる。支払能力以上に借金をして、分不相応な生活をする風潮を船乗りも批判する。借金を払えない債務者専用の牢獄の名を挙げるなど、庶民にとっては苦しかった当時の経済状況を反映したやり取りである。(568-602行)

しかし、不満を述べる者たちが常に虐げられているものであるとは限らない。登場した行商人は、冒険商人が外国で略奪を働いていることを批判するのである。(646-48、680-87行)しかし、冒険商人に言わせれば、商業の重要性は国家の安定にとって不可欠のものとなっている。これを批判することは、すなわち国家の敵になるのである。(704-7行)行商人は、イングランド貨幣の改鋳についても言及する。(712-15行)この改鋳問題は、イングランドの経済が一国だけではもはや成り立たない時代において、非常に重要なものであった。^(注12)

船乗りも冒険商人も、自分の立場からの発言に終始する。そこに双方に批判的な行商人が登場し、彼らの視点には存在しない論点を付け加えることにより、パースペクティブが広がると言えるだろう。また、職人は庶民の立場から発言していることも注目すべきだろう。^(注13)

冒険商人と船乗りが退場した後に残った職人に、家主が加わり、庶民の生活に大きな影響を与える問題が提起される。家主はイングランド人に貸すよりも、外国人に貸したほう

が利益が上がるため、家賃を上げて職人を追いだそうとしている。行商人は、家主だけではなく、外国人を連れてきて金持ちになる船乗りに対する批判が述べられる。さっさと外国人を送り返せと迫る行商人には、当時蔓延していた外国人排斥の姿勢が見られる。

最後のグループは、プロテスタントの解釈者と裁判官、そして判事である。判事は解釈者の勝手な説教のせいで過ちを犯すものが増えると難じ、一方、解釈者は司法関係者が、賄賂をもらって悪を見逃し、善を処罰していることを批判する。宗教関係者や法曹関係者が墮落を批判されるのも、チョーサー以来の伝統である。

この作品で取り上げられるのは、庶民の生活にかかわるものとして、教育問題、女性の性の乱れ、物価の高騰などであり、いずれもが外国人の流入と深くかかわっていることが指摘されている。この外国人の流入の問題は、外交政策が引き起こしたものであり、それが庶民の生活から、ひいては国家体制にまで影響を及ぼしていることも言及されている。また、司法関係者や宗教関係者の腐敗という、古くからある批判がやはりこの時代にも、形を変えて残っていることが明らかである。特に顕著なのは、国家批判を危険視する台詞が裁判官の口から述べられることであろう。(1483-85行)

しかし、これらの論争に決着はつかない。そして結論はやはり神の加護と女王の統治を願うものとなるのだ。他のインターロードの作品の論争がそうであるように、結局は神の加護と女王の弥栄を願うところに落ち着くのである。(1555行以降)

では、この作品において、行商人の予言はどのような機能を果たしているのだろうか。

予言は、それぞれのグループとの論争の後に述べられ、その多くは、批判の対象となっている者たちが不気味な怪物に襲われ、あるいは怪物に姿を変えるだろうというものである。この点では、行商人の予言は、珍奇さはあっても、作品の持つメッセージ性に十分に適合しているとはいえないだろう。

『靴直し』について

似たようなタイトルをもちながら、『靴直し』は多くの点で『行商人』とは違う世界観を持っている。これには、『行商人』がイングランドのみを舞台としているのに対して、『靴直し』は異教の神々の世界と人間界が交差していることによるものが大きい。

まず予言のあり方についてである。靴直しラフの予言は、『行商人』とは機能を異にする。ラフは、『行商人』のプロローグで語られている正しい予言のあり方、すなわち神にインスパイアされて予言を告げるのである。そして、その予言は、直接舞台であるボエティア国の命運にかかわってくるものである。当然、預言者役の行動範囲も違っている。預言者となって以降のラフは、人間界から異教の神々の世界を経めぐることになる。

また、『行商人』に登場する職業グループあるいは社会的地位グループは、父と母と娘の「家族」、「船乗り」と「冒険商人」、「職人」と「家主」、「解釈者」「裁判官」と「判事」の4つである。これに対して『靴直し』には、夫と妻の「夫婦」、「兵士」、「郷土」、「学者」、「宮廷人」、「公爵」「僧侶」などの人間達にくわえて、神話の世界からマルスとビーナス、三人のミューズ、三途の川の渡し守が参加する。さらにモラリティーの世界から、「軽蔑」「愚かさ」が登場し、「軽蔑」はビーナスとの

間に子をもうけるという境界を越えた接触が行われる。

舞台は、人間の世界と神々の世界にわたっている。人間の世界では、夫婦関係を巡るエピソード、ボエティア国が抱える社会的問題、ボエティアの国政にかかわる者たちの論争、そして王権を篡奪しようとする陰謀が描かれる。神々のエピソードは人間界にもかかわってくる。三人のミューズは人間界の衰えを語り、ビーナスとマルスの不倫はボエティアに政情不安をもたらすことになる。預言者となったラフは、この二つの世界を巡り、神々の世界でのマルスの覚醒をもたらし、その結果、ボエティアの平安をもたらすのである。すなわち、ラフは、ボエティア国という設定の墮落した人間界と、異教の神々の世界にかかわる予言を携えて、二つの世界を最終的に収斂させることになるのである。以下、それぞれのエピソードにわけて、『靴直し』の内容を検討していく。^(注14)

マルス、ビーナス、そして「軽蔑」

劇の冒頭は異教の神々の行列で始まる^(注15)。神々がボエティアに集まっているのは、罪を養うsecurity（「油断」）がcontempt（「軽蔑」）を生んだためボエティア全土に腐敗が広まり、天も疲弊してしまったためにジュピターが神々を呼び集めたからである。この作品では、神々の世界と人間界は連関しているのである。トレミー的な宇宙観を思わせる構造はこの作品の特徴のひとつだと言えるだろう。^(注16)

マーキュリーは参列している神々を紹介していくが、ジュピターとジュノーに次ぐ席次にいるマルスとビーナスを紹介する口調は辛辣である。マルスはビーナスの色香に迷い、軍装は柔らかな絹に変わり、戦もビーナスに

対して色欲をもって行われるだけなのである。(23-25行)^(注17)ここに筆者の主張が読み取れるだろう。すなわち、ポエティアの問題は外敵に対する備えを忘れたことによる慢心の蔓延であり、天の問題は、勇武が色欲に屈したことである。

マルスの墮落ぶりが舞台上で展開するのは、734行以降、ラフがマルスの宮殿を訪れたときである。ト書きには、びっこを引いている門衛が、錆びた鎧を身につけていることが明記されている。びっこは戦争の結果であり、錆びは平和に慣れて、備えを怠っている結果であることを象徴している。また、伝令官は「今の世の中では、金にできないことはない」とうそぶいてはばからない(772行)。同時代のインターロッドに多く見られる、金が支配する社会の弊害は、マルスの宮殿にも及んでいるのである。

その伝令官が語るビーナスの宮廷への道のりは、性的なイメージに満ちているという指摘もある。^(注18)(775-82行)これは、この作品中で強調される、ビーナスの持つ「色欲」という特性を象徴するものだろう。そして、その宮廷でマルスはビーナスの膝の頭をもたせ掛けて眠っているのである。(787-89行)

「寝取られ男」としてのマルス

マルスがビーナスとの性愛に溺れ、眠りこけている間に、ビーナスは「軽蔑」と情を通じ、二人の間には子供まで生まれている。つまり、マルスは「寝取られ男」なのである。^(注19)

マルスの墮落はその衣装にも表されている。ラフの言葉によればマルスはモリスダンサーのように着飾っている。(876-77行)これも、色欲に屈した勇武を象徴する台詞だろう。サテロスもマルスの柔弱さを批判するが、ビー

ナスは女性の立場から痛烈な戦争批判を行う。886行から始まるビーナスの戦争批判は、犠牲になるのは女性と子供であるという立場による。そこで展開される戦場での兵士の振る舞いは、ラフによるものと共通する。ビーナスはこの作品では、「色欲」の象徴としてマルスを墮落させ、国家に聞きをもたらず存在であるが、この弱いものの代表としての戦争批判は痛烈なものとなっている。

ラフがマーキュリーから預かった予言をマルスに伝える。ビーナスが浮気をしていること、隠し子までいること、その子が国を滅ぼすという予言を聞いて、マルスは怒り狂う。ビーナスは自分が疑われたことを嘆くふりをして、マルスを丸め込む。マルスは我を忘れて怒り狂ったことをビーナスに跪いて許しを乞うのである。まだマルスは「寝取られ男」の呪縛から解き放たれてはいないのである。

ようやくビーナスの不貞を知ったマルスは、激怒し女性に対する戦いを宣言する。1052行以降の台詞は、女性蔑視のそれである。ここで批判されている女性の悪徳の主なものを列挙すると以下ようになる。‘wantonnes’ ‘unconstant’ ‘follie’ ‘lightnes’ ‘trecherie’ ‘fraud’ ‘scum of ill’ ‘scorne of good’ ‘plague of mankinde’ ‘wrath of heauen’ ‘cause of enuie, anger, murder, warre’ ‘laugh Hiena like, weepe as the Crocodile’ (1052-65行) いずれも、エバによる楽園喪失以来の女性蔑視の伝統の線上にあるものである。この言葉とともにマルスは墮落の象徴であった衣装を脱ぎ捨てる。

予言に言及されているビーナスと「軽蔑」の子が登場するのは1200行である。^(注20)ビーナスの侍女が抱きかかえている女の子がビーナスと「軽蔑」との間に生まれた子供である。

彼女らはマーキュリーから、ビーナスのその後を聞かされる。ビーナスはマルスとの不義が夫のバルカンに明らかとなり、鉄の網に捉えられてしまった。ビーナスは女神の称号を剥奪され、「色欲」「ふしだら女」以外の名で呼ばれることを禁じられ、天から追放される。「軽蔑」も神の敵であると宣言された。そして、ジュピターは、ポエティアに対する戦争が勃発するが、「軽蔑」の小屋が焼け落ちるまで、ポエティア側に勝利はないことを宣言したのである。

ポエティアには外敵が侵入する。天の戦とポエティアの戦が収斂し、マルスとサテロスは力を合わせて戦い、勝利を収める。

最後に残るのは、天を追われたビーナスと「軽蔑」である。追いつめられた二人の不和は、色欲の末路を描いている。共に逃げようと嘆願するビーナスに、「軽蔑」は「自分は生まれながらに嘲り、善の敵、生命を奪うもの」(1518-19行)であると本性を現し、ビーナスを捨てる。ビーナスは観客に向かい、美德や貞操の重要性を告げるのである。

三人のミューズと地獄の渡し守

異教の神々として、三人のミューズが登場する。インターラードにミューズが登場するのも異例である。150行にわたるミューズのエピソードは現世の衰えを物語る。クリオは、歴史を叙述し、タリアは喜劇作品を書き、メルポミネーは悲劇を書くのが役目である。しかし、タリアは構想はありながらペンを持っておらず、クリオに借りようとする。しかし、クリオはペンを持っておらず、メルポミネーはペンを持ってはいても、タリアに貸そうとはしない。悲劇を叙述するペンはあまりにも鋭く、喜劇を書くには向いていないというの

がその理由である。この場に登場する兵士がする三つの質問によって、彼女らがおかれている立場が明らかとなる。

まず兵士はタリアになぜダチョウの羽を用いて書くのかを尋ねる。答えは、タリアが描く男達は、その本性が鳥の身体に獣の頭を持っているダチョウと似ており、‘greedy’, ‘devouring’, ‘disgusting’であり、頭は獣のように俗世のことしか考えないからというものである。この批判は、マルスが行った女性批判に対応するものと言えるが、男性の劣性が、「貪欲」という七大罪源のひとつでありながら、さまざまなインターラードで批判されている社会悪になっているところが興味深い。

次に兵士は、なぜクリオとメルポミネーが書かないのかを問う。メルポミネーは、戦も終わり、悲劇の場面无くなったと答える。一方クリオは、偉大な王や聖人などの歴史的人物に匹敵する者がいないからだと答える。

これは、作者による痛烈な現世批判である。もはや偉大な物語は書けなくなってしまった。この世に悲劇はなくなってしまった。残されているジャンルは喜劇だけだが、もはや喜劇が描くものは人間の浅ましい欲望の姿でしかない。社会批判であると同時に、作者の人間性の墮落に対する痛烈な批判にもなっている。

三人のミューズが人間界の墮落と衰えを象徴的に示しているのと同じように、地獄の渡し守シャロンもイングランド社会の身分の高い者たちの墮落ぶりを提示する。ラフとのやり取りの中で、シャロンは渡し舟に乗り込んでくる客には、法皇や聖職者、王侯を始めとする身分の高い連中から、生前にため込んだ現金をそっくり地獄まで持っていこうとする吝嗇漢などで溢れていると語る。そのために、地獄は満員となり、拡張作業が行われている。

地獄の苦しみの方が地上の苦しみよりまじだと考えている者が乗り込めないほどなのである。高位聖職者の墮落ぶりと、地獄墮ちはチョーサー以来の題材となっているものである。^(註21)

弱い亭主と悪妻

マルスとビーナスの関係は、サイクル劇から続く「尻に敷かれる亭主」の名残りである。マルスという武勇の代名詞であるべき神が、ふしだらな女にいいようにあしらわれているところに皮肉なおかしみを感じさせる。この関係は、人間界では靴直しのラフとゼロタの間にも読み取れる。舞台での所作(ゼロタにおびえてラフが椅子の下に隠れる)や、ラフの台詞から、ゼロタの悪妻ぶりは明らかになるうえに、マーキュリーが言及するゼロタの糸巻き棒(79行)が、ゼロタがエバ、そしてノアの女房の末裔であることを明確に示唆する。^(註22)天界での乱れや、ボエティアの危機がこの夫婦関係に表されているのである。

夫に対する横暴な扱いに対する罰は、驚くべきものである。「それと知らずに殺人を冒すまで」マーキュリーはゼロタを発狂させるのである。(90行)この罰が、ボエティアの再建に深くかかわる。ゼロタは公爵弑逆の陰謀をたくらんでいたエムニウスを殺害し、それにより、ボエティアに平和が戻ることになる。エムニウスの陰謀は、トレミー的に言えば秩序の破壊をもくろむものである。それが、発狂したゼロタにより阻止される。ボエティアの内部の混乱は解決される。同時にゼロタは正気に戻り、正常なラフとの夫婦関係が戻ってくるのである。タウンリーの『ノアの洪水』に見られる、トレミー的宇宙観のバリエーションとも言えるであろう。

夢

マーキュリーはラフを眠らせ、使命を与える。ラフに与えられた使命は、マルスの宮殿へ行き、戦いを忘れビーナスとの恋に溺れているマルスを目覚めさせることである。この予言は謎詩の形式になっており、ビーナスと秘密の恋人の間に3つの母音と2つの子音を持つ名前の子供が生まれ、国を滅ぼすだろうというものである。目覚めたラフは、夢の中でこの世のさまざまな悪事を見た観客に語る。巧みに正直者のふりをしている悪党がいる一方で正直者は損をし、商人は粗悪な品を売り、パン屋や肉屋、酒屋は目盛りをごまかす。このように夢の中で正直者が虐げられているというこの世の様を見るのは、『農夫ピアズ』と共通する。

論争

兵士は「満足」と名乗っている「軽蔑」とともに登場すると、これまでの自分の戦歴を語る。彼はペルシャやアジア、ムーア人を相手に戦ってきている。しかし、ボエティアでは平穏な日々が続き、兵士は省みられなくなっている。「満足」は神々をものぐ自分を敬えば、出世できるという。そこへ現れた宮廷人、学者、郷土とヘイウッドに見られる論争が始まる。この論争のテーマは明確には言及されていないが、誰がもっとも gentleman であり、存在意義があるかを議論している。(この議論では、ラフの役割は、ヘイウッドの『身分と家柄』の農夫に当たる。)

宮廷人は、国王の覚えがめでたく、それにより贅沢と権勢を楽しんでいることを吹聴する。

兵士は仲間助け合い、法と正義を守り、

物惜しみをせず、天の裁きを与える剣であり、哀れみの塗り薬である。

郷士も権勢を誇る。住民は彼の思いのまま、機嫌を損ねないようにと汲々としている。学者は書齋にいて、ペンの力で戦うという。天の高みや地獄の深みを見て、専らこの世のことには関心がなさそうである。宮廷人に、宮廷付きの学者になりたいのではないかと問われて、枢密事にかかわるのは愚か者だと反論する。

宮廷人と郷士はとうてい観客の共感を得られない人物である。彼らは権勢を嵩に着て、私利私欲にのみ走っている。しかも、宮廷人は国政を左右する立場にあり、郷士は領地に住むものにとっては絶対権力者である。特に郷士の腐敗は、直接住民の生活に重圧を加えるのである。

学者の立場は高踏的である。彼の世界は書齋に限られ、「生活」の実感が感じられない。兵士が最も観客の共感を得られそうなのだが、ラフの批判は逃れられない。ラフは兵士の多くが間男を働いているとからかうのである。また、後には「満足」から、戦場での殺戮や強姦を行っている兵士への批判も聞かされる。

結局この議論には決着はつかない。宮廷人と郷士、そして学者は連れ立って酒場へと向かうのである。作者の意図は、これらの社会的階層にいる者がいかに人々をないがしろにしているか観客に知らせることにあるのだ。

劇文学伝統の集大成としての『靴直し』

『靴直し』には、サイクル劇や道徳劇、そして社会的問題に傾斜したテーマを持つ後期インターラード、さらにはマスク劇などの劇文学の要素に加え、チャーサーやラングランドなどの伝統も取り込まれていることが明らか

となった。これらの要素をはらみながら、作品のテーマは、「国家の危機を如何に乗り越えるか」という点に集約される。ポエティアは内部的にはエムニウスが陰謀をたくらみ、外敵の侵入にも見舞われている。権力への渴望を露にするエムニウスの陰謀を止めるのは発狂したゼロタであり、また、国家の刷新を強く公爵に説くのはラフである。そして外敵を国外に追いやるのは、マルスの援助をえた、それまで不遇をかこっていたサテロスである。この間ポエティアの支配階級の郷士や宮廷人、学者は為す術もない。学者は外敵の侵入の伝令を聞いて初めてラフの予言が真実であることを知るのである。そしてその予言が靴直しという卑賤な人物によって行われたことに驚きを隠せない。(1385-92行) ここには、支配層が墮落したときでも、庶民が正気を保ち、国家を正しい方向に導くことができるという作者の思いが込められているのだろう。一方、サテロスを嘲った郷士は、戦に招集されることを恐れ、サテロスに代理を頼む有り様である。(1410-48行) イングランドは1585年からスペインとの戦争状態に入っていた。1588年に無敵艦隊を撃退して海上の覇権を巡るスペインとの戦いに勝利したものの、それ以降もスペイン欲待との衝突は続いていく。勝利に油断し、マルスの門衛のように鎧を錆びさせておくことは許されない、表面的な平和時にもサテロスの様な兵士を不遇のままにしておいてはいけないと作者はいいたかったのだろう。

公爵の最後の台詞が、作品のメッセージを伝える。彼はサテロスが代表する軍勢力と学者が代表する学問の二つが共に手を携えてこそ国家の安定が得られるのだと告げる。

Embrace the Xcholler, liue you two as friends,
For Arms and Learning may not be at iarre,
Counsell preuents, counsell preuailles in warre. (1686-89)
Our state supported both by Arms and Art. (1696)

注

(注1) 作者については F.P.Wilson, *The English Drama 1485-1585*, p. 38 注 1 および Richard Southern, *The Staging of Plays before Shakespeare*, p.544, H.S.D. Mithal ed., *An Edition of Robert Wilson's Three Ladies of London and Three Lords and Three Ladies of London*, *The Renaissance Imagination* Vol.36, Garland, 1988, を参照。

(注2) いずれの作品も、制作年代は Alfred Harbage ed., *Annals of English Drama 975-1700*, Third Edition, revised by S. Schoenbaum and S.S. Wagonheim, 1989 に準拠。ただし、*Annals* は『行商人』を作者不詳としている。なお、これ以外にも Wilson の手になると考えられている作品が Mithal で検討されているが、ここでは取り上げない。

(注3) この分類は、タイトルと主要な登場人物によるものである。文学的なジャンルとしては『靴直し』と『三淑女』『三貴族』はいずれもアレゴリカルなキャラクターと社会階層を代表する人物が登場し、社会悪をテーマとして取り上げる、後期インターロードに属している。Mithal, xiv。

(注4) チューダー朝イングランドにおける政治・宗教上の混乱や経済問題、フランスやスペイン、オランダなどからの外国人の流入、海上覇権を巡る争いについては、G.R. Green, *England Under the Tudors*, 3rd ed. Routledge, 1991 や John Guy, *Tudor England*, OUP, 1988, を参照。またヘンリー七世からエリザベス女王に至るまでの治世の間に書かれた作品の中に描かれているその時代特有の社会問題については David Bevington, *Tudor Drama and Politics: A Critical Approach to Topical Meaning*. Cambridge, MA.:Harvard Uni-

versity Press,1968 を参照。

(注5) インターロードの歴史的展開については David. Bevington, *From Mankind to Marlowe*. Cambridge, MA.:Harvard University Press, 1962を参照。また、1560年代以降の作品には触れられていないが、H.B. Norland, *Drama in Early Tudor Britain 1485-1558*, U. of Nebraska P. London, 1995。

(注6) Hardin Craig は、1550年代以降のインターロードについて、普通の劇にアレゴリカルな要素を加えたものというよりは、アレゴリーを劇化したものであると言える場合があることを指摘している。*English Religious Drama of the Middle Ages*, Oxford, 1955, p.382-83。また、ここで挙げた作品の梗概と解説は松田隆美編『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』慶応義塾大学出版会(1998)を参照。

(注7) 『行商人』に見られる社会批判については、L.B. Wright, 'Social Aspects of Some Belated Moralities', *Anglia* LIV, 1930, pp.136-40 を参照。

(注8) テキストは、W.W. Gregg ed., *The Pedler's Prophecy*, Malone Society Reprint (1914) を使用。

(注9) タウンリーの『ヘロデ王』42-49行では、ヘロデの従者がその権力の及ぶ範囲の地名を頭韻を用いて次々に挙げていく。インターロードでは、John Heywood の『天候の劇』に登場するメリー・リポートが自分がこれまで訪ね歩いた地名を列挙してジュピターの伝令としての適格性を吹聴する。どちらの場合にも（本人の意図に反して）コミカルな効果がある。

(注10) このように狂言回し役の登場人物がさまざまな社会的階層を代表する人々の間を回って、論争を行うのは Heywood の論争劇に顕著である。*The Plays of John Heywood*. Ed. Richard Axton and Peter Happ · 1991. 24-27。メリー・リポートについては、米村泰明「天候の劇と上演の場」川口短期大学紀要1995を参照。Ulpian Fulwell の *Like Will to Like* (『類は友を呼ぶ』1568年)にも同様の役割を演じる Nichol Newfangle が登場する。彼の役割は論争をさせるのではなく作品のタイトルにあるように似た者同士を集めて、全員

二つの予言劇

を破滅させることを目的としている。Nichol Newfangle の役割については米村「後期モラリティーにおける悪魔の存在について『類は友を呼ぶ』の場合」埼玉学園大学紀要2001年を参照。

(注11) Malone Society Reprint 版では、この登場人物は Traueller というスピーチヘッドが与えられているが、646行の行商人の台詞から彼が 'marchant venturer' であることがわかる。冒険商人についての簡略な説明は *Historical Dictionary of Tudor England, 1485-1603*, R.H. Fritze, eds., Greenwood Press, London, 1991, pp.332-34 を参照。

(注12) イングランドの貨幣の改鋳はヘンリー7世の時代から数回行われている。『行商人』の時代にかかわる改鋳は、1540年代のスコットランドやフランスとの戦争の結果、予算不足を補うために行われたものであろう。この結果は悪貨が良貨を駆逐することとなり、イングランドはインフレに襲われた。しかし、庶民がインフレに苦しんだ一方で、冒険商人達は、大陸で安価なイングランド商品への要求が高まったことによる恩恵を受けた。*Historical Dictionary* の 'Coinage' の項を参照。

(注13) Heywood の論争劇のひとつ『身分と家柄』に登場する農夫がやはり社会的身分の高い論争相手に庶民の代表として正論を述べる役回りである。農夫は中世以来社会悪の告発者として描かれているが（たとえば『農夫ピアズ』、その役割がこの時代のインターロードでは職人に受け継がれていることが考えられる。『靴直し』で警世の予言を行うラフもまた職人である。同時代に「靴直し」を主人公とした作品が書かれていることについて Mithal は cobbler tradition の存在を示唆している。(Mithal, viii)

(注14) テキストは *The Cobler's Prophecy*, The Malone Society Reprints, 1914 を使用。

(注15) この作品は、court-play だったと考えられている。English Drama 1485-1585, pp.59. そのひとつの根拠となるのが冒頭の神々の行列と、セレスが観客に向かって菓子を投げる演出である。Southern は神々の行列の演出について、ステージの上とフロアを用いていることを指摘し、

それもこの作品が court で行われた証拠だとしている。*The Staging of the Plays before Shakespeare*, pp.579-584。

(注16) 神話の神々が舞台上に登場することは珍しい。ジョン・ヘイウッドの『天候の劇』では、ジュピターが冒頭に登場して、神々の中の争いが人間界の天候に異変をきたした経緯を語り、ヴァイス役のメリー・レポートに登場のきっかけを与える。しかし、古典への言及が多く見られる作品、たとえばウエイジャーの『腹八分目医者いらず』などでも、作中人物からその名が言及される程度である。冒頭に神々が列席している様子は、むしろ宮廷で上演された仮面劇やスペクタクルを思わせる。ジュピターの使いということでは、『天候の劇』のメリー・レポートの役割に類似しているが、マーキュリーの役割は、メッセンジャーに徹している。ジュピターの命を受け、地上から預言者となるべきものを探し、予言を与えることである。メリー・レポートとは違って、積極的にストーリーに関与することはない。

(注17) マルスとビーナスの不倫は、よく知られた話題であり、本作ではオウイディウス『変身物語』第四巻や、チョーサー『カンタベリ物語』の『騎士の物語』において、アルシエテがマルスの神殿で語るエピソードを基にしていると考えられる。

(注18) J.A. Lavin, "Two Notes on "The Cobler's Prophecy"", *N&Q* (1962) pp.137-39

(注19) 1020行以降で、Folly の膝に頭をもたせ掛けて眠るマルスの周りで、ビーナスと「軽蔑」がダンスをする場面がある。ここで二人はマルスの周りを回りながら頭に角が生えている仕草をする。これはマルスが「寝取られ男」であることを示すものである。

(注20) マーキュリーがラフに与えたマルスへの予言は謎詩の形式になっている。その中で、国を滅ぼすことになる子供の名前を知るヒントが与えられている。その子の名前は Ruina という、破滅を表すものである。

(注21) 『農夫ピアズ』や『カンタベリ物語』に描かれる托鉢僧を始め、聖職者の墮落は演劇作品においても格好の題材となっている。インタールー

ドにおいては個々の聖職者の墮落ではなく、宗教改革の影響を受けて新教と旧教の争いを争いを描く作品が多い。代表的な作家には John Bale がいる。しかし、このテーマは次第にインターロードの題材として扱われることは少なくなってくる。それでも、宗教関係者の不徳を糾弾することは常套的に扱われている。

(注22) 中世の演劇や説教においては、夫をないがしろにする悪妻がよく取り上げられている。楽園喪失の原因となったエバ以来の女性の劣性を表すものとして、特にコミカルに描かれることが多かった。タウンリー・サイクルのノア劇に登場するノアの女房はその代表である。V.A. Kolve, *The Play Called Corpus Christi*, Stanford UP, 1966, Chap. 7を参照。インターロードでは Heywood の『ジョン・ジョン』に登場するタイプにその傾向が顕著である。